

共働きで子ども2人の里親



東京都品川区の広告関連会社経営、由美さん(58)と夫聡さん(58)=いずれも仮名=は里子の男子2人を育てています。夫婦は共働きです。

由美さんは子どもがができず、仕事が忙しかったので、「子どもなしの人生もありかな」と思ったこともありました。不惑を過ぎるころ、社員にある程度仕事を任せられるようになり、子育てへの思いが募りました。里親制度を知ったのはそんな時でした。

2004年、1歳半の男児(現在15歳)を迎えました。最初、添い寝をしても、ほ乳瓶を吸いながら向こうを向いていましたが、やがて抱っこされて眠るようになりました。「新米のママと

パパだから、可愛くてしょうがない。旅先では3人で手をつないだりして、幸せを実感しました」。07年には、2歳半の男児(同13歳)も加わりました。

仕事との両立が大変な時期もあり、自宅で子どもをあやしながら仕事の電話をしたこともあります。

しかし、今となっては良い思い出です。「育児を経験すると『相手ができるまで待つ』などをいや応なく経験できます。我慢することで自分が広がり、仕事でも生かされます」。子育てのさまざまな場面を思い返し、由美さんは楽しそうに話しました。

ファミリーホーム 大人数で花火やクリスマス



5、6人の子どもを預かるファミリーホームを神戸市で運営する小松拓海さん(38)と妻奈央さん(38)。実子3人・里子5人はみな男子で、高2、中2、小6、小5、小1・2人、幼稚園(年中)、1歳と並びます。週末は補助員さんが手伝います。

拓海さんの朝は10キロの洗濯機を4回回すことから始まります。子どもたちは各自都合のよい時間に食事をし、消灯時間も自由です。テレビは3部屋にありますが、多くがリビングに集まって一緒に見たり、ゲームをしたりしています。

年に数回、全員で花火やクリスマス、卒業祝いを楽しみます。近隣のファミリーホームと合同でやることも多く、大人数で盛り上がりやすいです。毎年、家族10人がワゴン車で日帰りや泊まりがけの旅行もします。遊園地やテーマパーク、北海道など。子どもたちにどれだけ喜んでもらえるか、拓海さんが計画を練ります。

実子も里子もよく友だちを連れてきます。また、小6・小5が中心に小さい子にご飯を食べさせたり、お風呂に入れたりするのを手伝います。実子、里子の区別なく、面倒をみたり見習ったりという兄弟の関係があります。拓海さん・奈央さんは「私たち夫



婦はずっとここにいる。子どもたちが巣立った後も、帰って来られる場所になりたい」と話しています。

メッセージ 「早い段階で家庭生活へ」

女優／サヘル・ローズさん



私は母と2人暮らしです。母は20代前半の時、7歳の私を施設から引き取ってくれました。知人を頼って2人で日本に来ましたが、すぐに母娘2人暮らしになり、母はきつい仕事をして私を育ててくれました。

小学生の時、週に1度、フードコートで1杯のラーメンを2人で食べました。母はいつも少ししか食わず、残りを全部くれるのですが、帰りのバスで母のお腹が空腹で鳴るのです。貧しくとも、母の愛情をいっぱいを受け、楽しい家庭でした。だから、母とは今も大の仲良しです。仕事の休憩時間などに電話やLINEで「サヘルちゃん、何時に帰ってくるの?」「もう少し待ってね」なんてやり取りを毎日のようにしています。

2013年、私がいたイランの児童養護施設を訪ねると、私を覚えている職員さんがいました。女優をしていると報告すると、「励みになる」と泣いて喜んでくれました。施設の方々も懸命に子どもたちと関わっているのです。ただ、1人の職員が何人もの子どもをみなければなりませんし、勤務時間外は関わられません。子どものニーズに十分には応えられず、子どもが寂しく感じる場合もあります。早い段階で家庭生活に移れる方が子どもにはよいと思います。

母と私は「週末里親」を将来やりたいと希望しています。母が子ども好きなので、本当の孫のようにかわいがると思います。